

ボールパーク構想とエリアリノベーション

スポーツマーケティングゼミナール 1316037 田中 孝道

1. 研究動機・研究目的

我が国ではこれまで、公共スポーツ施設は、公共サービスの延長線上で運営されてきているため、公的資金を投入し、多くの国民にスポーツをする機会を提供してきたと評価されている（スポーツ庁, 2016）。一方で、それゆえに赤字経営の施設が多く、維持管理に費用を要するコストセンター化していることが課題とされている（スポーツ庁, 2016）。そのため我が国のスタジアム・アリーナはコストセンター（公的資金中心の負担の対象）から「稼げるスタジアム」プロフィットセンター（官民協働による収益を生み出す対象）へと移行されることが望まれている（日本再興戦略 2016）。

プロフィットセンター化の事例の一つとして、近年、日本のプロ野球が開催される球場は、アメリカメジャーリーグベースボールの本拠地のようにエンターテインメント性を高めた「ボールパーク」化の取り組みが進められている。日本のプロ野球団がすすめている「ボールパーク化」は球場の改修に加え、その周辺施設の整備や新たな商業施設などの併設が行われている。ヤクルトスワローズのように 2020 年の東京五輪にむけた、球場を一体としたエリアの整備も見られるようになった。これら球場とその周辺を巻き込んだボールパーク化構想は、「エリアリノベーション」というエリア形成における考え方の一つと考えられる。

フロリダ (2018) は都市の開発について、創造的事業が展開しやすいフレームを都市空間に提供し、新たに創造的な人々を誘引（交流人口拡大）し、その地域の文化の更なる拡充（地域の魅力創造）を目指していくような正の循環を内包したものとしている。また、黒川 (2006) は、現代のコミュニケーション喪失に対して、学校や家庭そして共有空間が都市やエリアには重要で、個と全体を結びつけ、人と人のコミュニケーションを復活させる中間領域、共有空間を無数に必要としていると指摘している。つまり現代の都市や地域（エリア）の開発や再生（リノベーション）の必要性を説いていると考えられる。横浜 DeNA ベイスターズでは、横浜スタジアムを新たなコミュニケーションを育む空間「コミュニティボールパーク」へとプロジェクトを進めていることを勘案すると、これらエリアリノベーションの考え方と親和性があると考えられる。

地域貢献や地域密着、エリアリノベーションという視点で分析・検討することで今後のスポーツ施設の改修や建設に役立つ資料が提供できると考えられる。

本研究では、球場の立地特性や、球場を核としたまちづくりの成り立ちに着目し、エリアリノベーションの枠組みを援用し、ボールパーク構想を説明することを試みることを目的とした。

2. 研究方法

本研究では、文献やインターネットによる資料を収集した研究を行った。対象とした横浜 DeNA ベイスターズは、球場のボールパーク構想化構想から横浜スポーツタウン構想へと球場単体から街レベルに発展させた事例であり、エリアリノベーションを援用する事例とし

て適していると判断した。2019年4月から12月までの期間で、インターネット上のニュースや資料、及び横浜DeNAベイスターズ編著「BALLPARK (2015)」を用いて、エリアリノベーションの枠組み(馬場ら, 2016)との比較を行った。

本研究ではエリアリノベーションを、馬場らの定義を参考に従来の行政主導と異なる、小さな変化が次の変化を呼び起こし、連鎖を生じながら自律的に継続してエリアが変化していくようなまちづくりと定義した。また、エリアリノベーションが発生しているまちに共通する3つの「基本構造」と9つの「ローカライズ」と呼ばれる地域ならではの事情や条件によって左右される要因によって構成される「エリアリノベーションの枠組み」を用いた。

3. 主な結果と考察

表1は「横浜スタジアム」と「THE BAYS」についてエリアリノベーションの枠組みを援用したものを示した表である。ともに基本構造①の空間のつくられ方のプロセスの逆転、不動産キャラを除いたキャラクターについてはエリアリノベーションの枠組みを援用したところ一致していることが明らかになった。ローカライズについては、①変化の兆し、②きっかけの場所、⑥行政との関係、⑦プロモーションの手法が該当する項目であった。明確な記載はなかったものの、ベイスターズがプロセス全体の当事者として関わりながら、地域との良好な関係維持しつつ、ベイスターズという点の開発が、エリア全体に波及していると考えられる。

表1. 横浜DeNAベイスターズとエリアリノベーション

基本構造		横浜スタジアム	THE BAYS	ローカライズ		横浜スタジアム	THE BAYS
1	空間のつくられ方のプロセスの逆転	○	○	1	変化の兆し：サイン	○	○
2	火付け役がプロジェクトのプロセス全体の当事者	△	△	2	きっかけの場所：スペース	○	○
3	変化が起り、継続するために、必ず存在しなければならないキャラクター ①不動産キャラ：調整する人 ②建築キャラ：空間をつくる人 ③グラフィックキャラ：世界観をカッコよく表現する人 ④メディアキャラ：情報を効果的に発信する人	△	○	3	事業とお金の流れ：マネタイズ	△	○
				4	運営組織のかたち：オペレーション	○	×
				5	地域との関係：コンセンサス	×	×
				6	行政との関係：パートナーシップ	○	○
				7	プロモーションの手法：プロモーション	○	○
		○	○	8	エリアへの波及：インパクト	○	×
				9	継続のポイント：マネジメント	×	△

馬場ら (2016) の定義をもとに筆者作成

4. 結論

スポーツ現場でのエリアリノベーションの事例は少ないために、項目によってはエリアリノベーションとの関係が明確には表れないものがあったが、ベイスターズの行う球場を核とした構想は、先進的であり、今後のボールパーク化及び周辺の整備へ参考となる事例として捉えることができた。つまり日本における球場のボールパーク化は、エリアリノベーションの枠組みを援用して説明することができると考えられる。

5. 卒業論文の執筆を終えて

思い返すと正直とてもつらかったです。卒業論文を執筆し始めて、執筆し終える日まで、いろいろなことがありました。自分の中での考えと、執筆の中で新しくわかったことがつながって嬉しかった時や、どんなに調べても答えを導き出すことができず、どのように進むべきかわからなくなりつらくなった時など、たくさんありました。本研究を進めるにあたり、指導教官の工藤康宏先生にはたくさんのご指導いただきました。なかなか作業が進まず、たいへんご迷惑をおかけしましたがなんとかここまで到達することができました。また、大学院生の方々にもたくさんのご支援をいただきました。ありがとうございました。